

## 巡礼の年（後編）

2017年10月13～20日まで、ワルシャワ、プラハ、ブダペシュトをめぐるなかで心に浮かんだ言葉をそのままに書きとめた散文。（前回つづき）

井坂康志

### 【目次】（今回分）

プラハへの鉄路

反転

ユダヤ人街

ボヘミアの平原

カフカと悪夢

小さな夜の音楽――アイネクライネナハトムジーク

私が大学に入った頃

死と月

説教詩

ブダペシュト東駅

デンピンスキー通り

メズーサー――ブダペシュトのシナゴグにて

鎖橋

レインコート団

窓辺にさく

ブダペシュト中央市場

### プラハへの鉄路

私は昨晚

ギリシャ時代の青年が

川の畔で豎琴を弾きながら

ゆるやかな蟬の声とともに

神々の黄昏への追悼を歌うのを耳にした

鉄路もプラットフォームも

あの時代とさして変わっていないはずだ

真っ暗なワルシャワの街を出て

数時間もたたぬというのに

懐かしい平原と丘の交互に繰り返す

鮮血の葉の一点が

後期ゴッホをまねたように  
魂に確かな痛みを残す

(一度だけ二頭の美しい鹿の  
平原を駆けるのを目にした)

ブラハまでの 8 時間  
カトヴィツェ  
チェンストホヴァ  
オストロヴァ

この鉄路が移送に供された  
確かにそうなのだ  
駅に着くたびに異国のアナウンスが告げる  
次第に心は疲れ  
東欧の子音ばかりのアクセントが痛みとなり  
親しみのない顔立ちがいらだちをかきたてる

つまるところ  
何をしてもしなくても  
何も残らない  
すべては消耗で  
問題は消耗のしかただけなのだ

ブラハまでの 8 時間  
カトヴィツェ  
チェンストホヴァ  
オストロヴァ

目をつむる  
今までにあった印象的な人のことを  
どちらかというと言いがたかった思いを  
どちらかというと言いがたかった思いを  
どちらかというと言いがたかった思いを

そしていつか見た夢を思い出す  
流れるのを忘れてしまった川の夢  
泥に帰って行くように  
汽車はブラハ中央駅に入っていく

駅前緑地にはウッドロー・ウィルソンの像が

古代ローマの英雄みたいに立っていて  
その不吉なフォルム  
悪夢は今も進行中と仄めかす

## 反転

君はあの城からやってきた  
君に名はない  
君は何者でもない

ただし、不幸なことというべきなのだろう  
君は何者でもないという限りにおいて  
何者かであるということだ  
けれどもそれが何か  
君は知らない

君はリセットされた反転であり  
反転された仮想だ  
君は何ももたない  
君はあらゆるものであるから  
何ももつ必要がない

反転の中でさらに反転すれば  
鏡にもう一つ鏡をさしだすように  
反転しつつ伸張し  
万華鏡に似て  
反転は新たな自由なる反転をつくる

だがこれだけは覚えておいてほしい  
あえてたったそれだけのことを想像する者は  
君が思う以上に少なく  
いや反転の意味さえも  
知らずに生きる者が大半だ

反転した街に  
反転した月が昇る  
反転した水車とともに  
反転した街は  
失われた街であるが

失われつつも死なず  
死ぬことを許されず

人はそれを呪いと呼び  
忌むけれど  
反転を經由せずして  
もう一つの隠し扉を知ることはできないのだよ

### ユダヤ人街

誰の心にも古い町（オールド・タウン）がある  
当然にしてユダヤ人街があり、墓地がある  
街は人の心に相似する

誰にでもさびれ果てたユダヤ人墓地で  
楡の枯れ葉に取り巻かれ  
ひたすら悲しんだ過去があるから  
時に人はユダヤ人街に赴きたくなる

もっばら悪夢の中で

### ボヘミアの平原

静かに流れよ  
車窓をめぐる  
ボヘミアの平原よ

愛は悲しみに似て  
スメタナの旋律とともに  
ボヘミアの平原はめぐる

つややかな川面に  
なめらかな霧

楡の木は  
影絵のようにうつむいて  
やわらかなアダージョ

風琴のトライアングル  
どこまでも  
いつまでも

静かに流れよ  
車窓をめぐる  
ボヘミアの平原よ

#### カフカと悪夢

暗黒の沼から取り出されるのは  
腐った自転車でも  
ただれた皮膚でも  
引きずり出された臓物でも  
巨大生物の死骸でもなく

暗闇から取り出されるのは  
病める魂の友  
それは言葉だ

ブラハの夜に見る夢は  
蒼き馬の翼  
灰色のペンキ塗り  
ゴーレムのうめき  
ユダヤ人基地の囁き

太古の呪いの記憶への回路  
堅くつややかなオーボエ  
ラビたちのつぶやく連祷  
夜に立ち上る霧  
黒いアレグロの響き

#### 小さな夜の音楽――アイネクライネナハトムジーク

かなでましょう  
この小さな夜に  
子供用のヴァイオリン  
お父さんは宮廷の音楽師

熟れたいちじくの果肉のような  
赤子の頬のような音を  
畑から引っっこ抜いたかぼちゃみたいに  
今かなでましょう

あの星たちに聴かせましょう  
いつかは死ぬ身の私たち  
この小さな夜に  
子供用のヴァイオリン  
レンズ豆のスープみたいな第二楽章  
ブルガリアの舞踊みたいな第三楽章

夜とともに生きるのです  
夢とともに生きるのです  
子供用のヴァイオリン  
幼くして死んだみんなのために  
この小さな夜の音楽を

#### 私が大学に入った頃

私が大学に入った頃  
学生運動は遠くすぎ  
IT革命には早すぎた  
淡水と海水のまざった時代  
汽水にして分水嶺の時

当たり前のように浪人し  
たばこの匂いととも  
暴力を日常として  
本を読めば偉くなれると信じ  
祖国は植民地ともつゆ知らず  
憲法をマントラがわりに  
誰をも右翼と左翼にわけて安心する

世界が嘘に包まれるとき  
すべては正しく見える  
ロックシンガーが反骨を歌い  
マーケティングがうつろに再生産する

うららかな水たまりから  
ゆっくりと流れを変えた  
先は今も定まらずとも  
偶然ながら  
混沌の始まりを見たよろこびとかなしみ  
今も消えることはない

## 死と月

パンクラクの地下鉄を出て  
夕空に振り返る  
白糸のような月が出る

労働者たちは家路を急ぐ  
主婦はたらみみたいなパンを手にしている  
誰もが一台だけの貨車のように  
日々を生きている

目の下に誰もが  
刃物でえぐられた傷があるので  
それは知られる

つかのまの夕刻  
イングリッシュホルンの艶めかしく

少なくともこの地の人  
月を眺めて  
死を思うくらいの  
たしなみはある

## 説教詩

社会に出てから  
見知らぬもう一人の自分に出会った  
卑しさも  
醜さも  
無能も

無思慮も

それまで否定したすべてが  
あらゆる罪悪が、悪徳が  
内面に豊かにあった  
名付けられることのない下水のように

やがて知る

小さく神の名を呼ぶ  
自分でもどうにもならない  
神の名を呼ぶ人  
それが自分と

するすると下りてくる

斧は教える  
おまえは何も知らない  
根源の痛みしか  
最後は死しか  
おまえに何かを教えるすべはないのだと

知るがよい

生きるとは何かを得ることではない  
失う中で目をつむらぬことだ  
だいじなのは目あけておくことだ  
だから目だけはよくなければならない  
練達の漁師が  
ひとひらの雲からでも  
疾風のおいをかぎわけるように

(神の名を呼べ

死にたい気持ちを友として  
神の名を呼べ  
死にたい気持ちを友として)

射撃手は見るだろう

その精巧なレンズから  
うなじの中心部に  
焦点を合わせる  
そのときはくる  
最もきてほしくないときに  
最もきてほしくない角度から



予期するなどかなわぬこと

軌道は予測されないから意味を持つ  
ならば喜べ  
願ってもない教えと  
凶弾に倒れる意味を知れ

(神の名を呼べ  
死にたい気持ちを友として  
神の名を呼べ  
死にたい気持ちを友として)

苦く重たい労苦を知らぬ者は  
もう一人の自分に出会ってさえいない  
ならばまだその人生は  
はじまってさえいない

だから  
人を見るときは顔と言葉ではなく  
後ろ姿と指先を見なさい  
もし心が熱くなったら  
熱くなりすぎないうちに  
コップ一杯の冷水を  
自分の心にかけてなさい

#### ブダベシュト東駅

初秋を抜けると  
一転して大気は針金  
通りは打ち捨てられた運河  
駅は廃墟の墓石

#### デンピンスキー通り

明け方  
トロリーバスの  
堅い地面を掘る  
月がでている

血に染まる赤い空に  
骨のように白い月が  
呪われたタロットのように  
明け方  
母を求める  
小さな子供たちの  
いくつもの失望を乗せて

#### メズーサ——ブダペシュトのシナゴークにて

彼女はいう  
メズーサに接吻しなさいと  
目のもう一つの働きに  
そろそろ思いを馳せるべき時だと  
やがて月の時間がやってくる  
血のような月が  
チーズのように溶けていく時が  
やがてやってくる  
メズーサに接吻しなさい  
透明な知性を遠ざけなさい  
苦い涙を捧げなさいと

#### 鎖橋

鎖橋に  
鳳凰の雲のよぎり  
市電の窓は黒い鏡になり  
仕事を終えた人たちの疲れた横顔を  
太古の英雄の  
水のワルブルギスのように映す

そのときの雲  
追憶の秋風に  
吹き払われよ

そのときの蒼  
吹き払われよ  
ブダペシュトの鎖橋

## レインコート団

音もなく  
見ている  
レインコートの人たち  
カーキ色の顔のない一団  
（明け方の風の吹くまで  
見つめるのをやめないで）

濃いよもぎ色のレインコートに  
夜のブダベシュトの霧のかかり  
（明け方の風の吹くまで  
見つめるのをやめないで）

無音のレインコートの人たち  
合わせ鏡の果てからの視線のように  
無機質な眼球を中空に漂わせ  
顔のない空間から  
うつろな漆黒の目  
（明け方の風の吹くまで  
見つめるのをやめないで）

## 窓辺にさく

レンガ色の花  
まつげのかすかにうつむいて  
上目遣いに問う  
（今日ごはんは、どうするの？）

許して下さい  
生活の苦しさからとはいえ  
失望の涙を  
あなたの頬にふりかけた  
（今日ごはんは、どうするの？）

パンを与えてくれたのは  
あなただったと知る

街を追われても  
あなたはただ静かにわらっていた  
(今日ごはんは、どうするの?)

くちびるは硬直して  
ただ涙ばかりあふれてやまぬ  
ボヘミアを覆う無名の雨のように  
(今日のごはんは、どうするの?)

私があなただを心配するよりも  
あなたが私を心配してくれていたとは  
そんなことも知らずにいた  
(今日ごはんは、どうするの?)

私たちの日々の糧を  
ありふれた悲しみを  
この窓辺に  
レンガ色の花の一本  
乾いた風に吹かれながら  
今あなたがやさしくわらう

#### ブダペシュト中央市場

ドナウに面した  
トラム 49 番を降りる  
東方風の薄いレンガに覆われて  
市民の行き交う市場  
雑踏に甲高い売り声

グーヤシュのつんとくる香り  
アカシアの蜂蜜  
豚のソーセージは焦げて  
ハンガリー・ビール

男も女も  
皺よる大きなおなかが健康の証だ  
食事と酒が神話だった時代  
名残をこの市場はとどめている